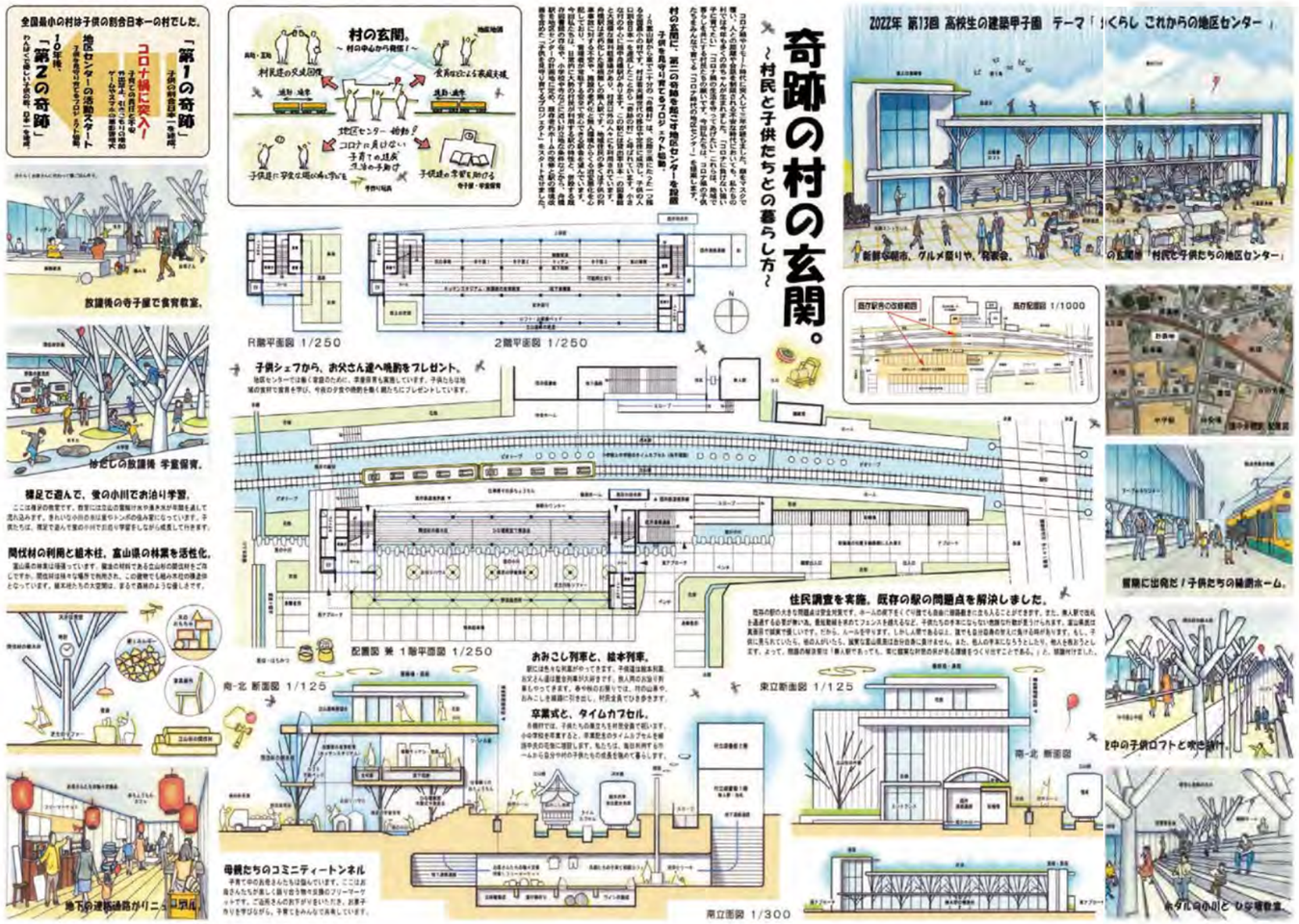
優勝

奇跡の村の玄関。 ～村民と子供たちとの暮らし方～

富山県 | 富山県立富山工業高等学校　選手…3年生5名

表彰式にて



東日本大震災が発生してからはや11年が過ぎようとしています。震災復興が進む中、復興や特に福島第一原子力発電所事故による避難地域の解除に伴い、地元に戻った数多くの住民の生活を支援する施設が建てられました。その多くは震災以前にも数多くつくられてきた一つの箱に多くの機能が複合された地区センターのような施設でした。ただでさえ少子高齢化で縮小する地域にはオーバースケールの建物となっているのが現状だと思います。少子高齢化でまちが縮小する現在、地区センターのような施設は地域の方が、目的がなくても気軽に立ち寄れ交流ができる施設であるべきだと思います。そのためには地域の徒歩圏内に地域に溶け込むように設けるか、地域の多くの人が頻繁に利用する場に設けるべきだと私は考えます。地区センターはまさに「まちになじむ空間」がベストです。また、少子高齢化が進む中、いかに若い世代が使いやすく安心して子育てができるかも地区センターの重要な要素です。

この案の計画地の「舟橋村」は全国最小の村でありながら、若い人の定住者が多く、子供人口割合日本一を達成した「奇跡の村」と呼ばれ、その流れを加速するように地区センターのテーマを「子供を見守り育てるプロジェクト」としたのはとても的確です。

敷地選定も的確です。駅はまち(村)の玄関であり情報の拠点と言えます。本計画地の「越中舟橋駅」はまち(村)の中心に位置し、近くには小学校があり、貸出率日本一の図書館があります。まさに地域の多くの人が頻繁に利用する場＝駅に設けられた地区センターで情報の拠点と言えます。

計画としては全体として少し大きな気もしますが、このセンターの大きな特徴は、間伐材を利用した樹木の構造に支えられた駅につながる段々状の半屋外空間です。冬の寒さは気になりますが木にあふれたこの場は、子供の遊びと学びの場・イベントに使用可能なホール・まちのマーケットなどさまざまな役割を果たし、まさにまち(村)の玄関です。誰でもが気軽に立ち寄れ、そこでのアクティビティが活気あるファサードをつくり、人々を導きます。

また、さまざまなアイデアに対するわかりやすいスケッチで表現されたプレゼンボード、線画によるCGで動線と空間を表現しつつ重要な場面で線画がスケッチに替わる動画による表現は見る者を惹きつけるわかりやすいプレゼンテーションでした。

このようにこれからの地区センターの一つのあり方を示し、それをわかりやすくプレゼテーションしたこの案は、実際に実現したいと感じる素晴らしい提案でした。よって、審査員一同優勝と決定しました。優勝おめでとうございます。　(堀)

受賞のことば

このたびは、私たちの作品をご評価いただき誠にありがとうございました。今回の作品は、ご協力いただいた地域住民の方々や、ご指導くださった先生方からの温かい支えがあったからこそ完成させることができた素晴らしい作品であると考えております。

「奇跡の村の玄関」と名付けた今回の作品の内容は、北陸三県で唯一残る全国最小の村が達成した「子供の割合日本一」という第一の奇跡を、地区センターの活躍で「コロナに負けない子供たちに育てる」という第二の奇跡につなげることを最大の目的にした計画案です。今回の計画では、老朽化した無人駅のホームに沿って、新しい地区センターを配置するとともに、既存の駅舎全体を最小限のリニューアルと新しい運用方法で地区センターと同化させ、駅と地区センターが一体利用できる計画案をつくり上げました。

コロナ時代に突入して、私たちの暮らしの中では、さまざまな問題の解決が求められています。私たちは、子供と村民の生活を助けることができるコロナ時代に必要な地区センターの誕生を目指しました。この地区センターのおかげで、私たちの暮らしが少しでも幸せに近づくことを願っております。

私たちは今後も、作品づくりを通して、得られる知識や経験を積み重ね、勉学に励み、努力を続けていきたいと思っております。このたび、ご評価いただけたことは今後の私たちにとって大きな励みになりました。本当にありがとうございました。(富山県立富山工業高等学校 建築工学科 建築甲子園 選手一同)